

体験学習を今後の生活につなげ、自己肯定感を育むキャリア教育

長野県飯田市立飯田西中学校 中島博文

1 はじめに

本校は学校教育目標「切磋琢磨し、より高いより広い自己の確立」の具現に向け、全教育課程でキャリア教育を実施している。本校はキャリア教育を「将来の夢や目標に向けて、学ぶ目的や働く意味を考え、自分の生き方を探るための教育」ととらえている。

1年生は農業体験学習、2年生は職場体験学習、3年生は林業体験学習に取り組んでいる。生徒たちが体験学習で得たことを今後の生活につなげ、自己肯定感を育むにはどう指導したらよいか、平成20・21年度の実践から明らかになってきたことを述べる。

2 平成20年度の実践

(1) 生徒の実態

本校は飯田市街地の西側、風越山の麓に位置している。風越山は飯田市の水源であり、市民のシンボリックな山でもある。3年生が、風越山の保護に奉仕活動として取り組んでいる曙友会の人々の生き方に触れることを通して、地域貢献の大切さを実感して欲しいと願った。しかし、生徒たちの中から「何で林業なの。」という声も聞こえてきた。学習を始める前のレディネスでは「風越山の必要性をあまり感じない。」という意見など、学年のほぼ半数の生徒は風越山に対する意識が高いとは言えなかった。

(2) 問題意識その1 「木は伐ってはいけないのか、間伐をするのか」

生徒の実態から、問題意識を育むことを重点に取り組んだ。「あなたは普段、風越山に対してどのような思いを持っていますか」という問いに対して、Aさんは、

「自然を大切にしたい。山には木があるから地球温暖化防止になる。だから木を伐ってはいけない。」

と記した。確かにAさんの言うように、木があることで地球温暖化防止になる。しかし、花崗岩からできていて崩れやすい風越山は、間伐が不可欠である。「間伐が必要だ」と教えれば済むことかもしれないが、追究への意欲を思うように喚起できないのではないかと考えた。問題意識が低ければ、認識の変容につながるような価値ある資料を提示しても生徒は驚かず、主体的な追究には発展しないだろう。

そこでAさんの意見を学年全体(3学級)に広げ、生徒間の考えのズレを生かすことで、「風越山を守るためには木は伐ってはいけないのか、間伐するのか」という問題意識をもたせた。

5月半ば、本校の伝統行事「探鳥会」で風越山に入山した時のことである。生徒たちは間伐してある事実を見て、口々に「あっ！木を伐っている！」と大声で叫び、「なぜ、間伐をしているか」の疑問をもった。その後、森林組合の方を招いての講演会「風越山の現状と間伐の必要性について」を経て、間伐体験に向けての準備が始まった。

(3) 問題意識その2 「職業ではないのに、曙友会の方々の願いは何だろう」
生徒たちは間伐体験に臨んだが、伐る時に肩や手に加わる痛さや重さは予想以上だった。
体験後の授業で次のような話し合いをした。

T 「体験学習でお世話になった曙友会の皆さんの姿や言葉から感じたことを発表しましょう。」

S 1 「良い木は今、売りに出せないので大変。しかも作業は大変危険。」

S 2 「曙友会の人たちの給料はきっと公務員より高い。」

S 3 「20万から30万もらっている。」

T 「正規の仕事ではありません。職業は別にあります。」

S 4 「えっ!」「どうして?」

生徒たちは「曙友会の人たちは給料をもらっている。」と考えていた。1、2年時の体験学習で「働いて生計を立てる」を学んだことが影響しているのだろう。曙友会の方々の仕事が、生計を立てる本来の職業でないことに驚きをもち、新たな問題意識「職業ではないのに、曙友会の人たちの願いは何だろう」をもった。これを学習問題とした。

(4) 曙友会の方々の営みに共感する生徒たち

生徒たちは、学習問題を追究した結果、曙友会の人たちが、職業ではないのに風越山の保護に熱心に取り組んでいる意味がわかってきた。Bさんは「すごく達成感を感じました。それは曙友会の皆さんの姿にすごく感動したからです。曙友会の皆さんはこれが本職ではないし、今の時代、木が高く売れるわけではないのに風越山のため、地域のためにと必死で仕事をしていました。その姿を見て私も頑張ろうと思いました。また、間伐をしていると私も風越山の役に立ちたいと自然に思えてきました。」と発言した。

生徒たちは林業体験学習以後、地域の行事に積極的に参加する3年生へと変容した。

(5) 示唆されたことと、平成21年度の研究の方向

体験学習で得たことを今後の生活につなげるために、次の ・ の有効性が示唆された。

問題意識をもちながら体験学習に臨むことで、主体的な追究ができる。

「働くことの意味」を追究することにより、人々の営みに共感できる。

また、前述のBさんの発言「間伐をしていると私も風越山の役に立ちたいと自然に思えてきました。」がヒントとなって、次の仮説が見えてきた。

【仮説その1】 追究を振り返ることで、自分が歩むべき目標を見いだすことができるのではないか。

この仮説を実証するために、 で示した研究の方向に則り、平成21年度の研究を進めることにした。

3 平成21年度の実践その1 問題意識を育みながら農業体験に臨み、地域の方の営みに共感し、歩むべき目標を見いだした中学1年生

(1) 農業体験学習の概要

本校1年生は、農業体験学習を7月と9月の2回実施した。7月は本校から20km離れた飯田市千代地区で、一泊二日の日程で実施した。4人一組ずつ22班に分かれた。9月は

学区にある 17 軒の農家で、2 日間体験学習を行った。なお、本稿は 7 月の農業体験学習を中心に記述する。

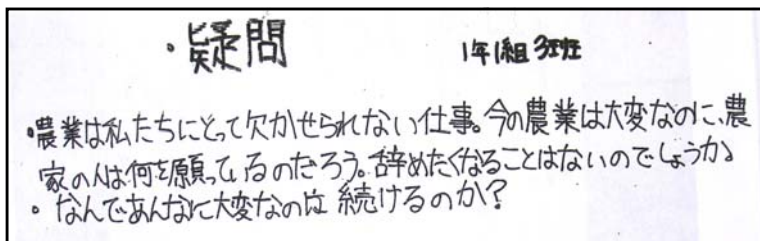
(2) 問題意識「大変そうなのに、なぜ、ずっと続けてくることができたのだろうか」をもつ生徒たち

本校は市街地に位置しているためか、1 年生で専業農家の家庭は 3 %に過ぎない。「家庭は農業は全くやっていない」が 62 %を占めた。そこで、農業への関心をもたせようと事前学習で「飯田市の農業」に



【農業体験宿泊学習】

ついての授業を行った。その中で、生徒たちは「自給率の低下」や「高齢化問題」、「長時間働いている」現状を「大変な状況」ととらえた。これらから1組3班は「農業は欠か



すことができない仕事。何であんなに大変なのに続けるのか」という問題意識(資料1参照)をもった。このことについて学年全体で授業を行い、学年統一の学習問題「大変そうなのに、なぜ、ずっと続けてくることができたのだろうか」を設定した。Sさんは学習問題の予想を「収穫の楽しみがあるからだと思う。辛いけどたくさんの喜びや楽しさが味わえるからだと思う。どうなのかは農業体験で質問!!」と学習カードに記した。

(3) 宿泊農業体験学習で学習問題を追究する生徒たち

生徒たちは、農業体験で学習問題を確かめようと次の2つを実施した。

農家の方々の営みを観察した。「とても広い畑で大豆の苗への肥料を、しっかりと蒔くことができた。農家の方はすごい速さで蒔いていてプロだなと思った。」等の感想を持った。



【肥料を蒔く】

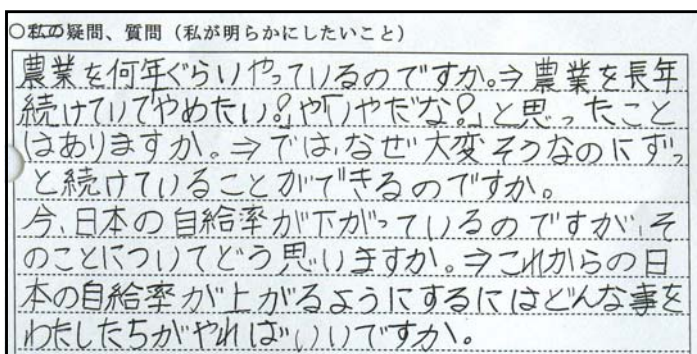


【宿泊農家での聞き取り調査】

夜の時間を利用して、宿泊農家の方への聞き取り調査を、事前に考えた質問項目(資料2参照)を基に行った。

(4) 聞き取り調査で聞いてきたことを発表し合う生徒たち

体験後に行った授業で、生徒たち



【資料2 事前学習で、聞き取り調査の内容を考える】

は聞き取り調査で聞いてきたことを発表した。次のように4つに分かれた。

【お客さんが喜んでくれるから。やりがいがあるから。】

- S1「農業は大変だけど楽しい。40年間続けていて、お客さんが喜んでくれると嬉しいし、今は大きな機械があるので続けることができる。」
S2「『おいしい』と言ってくれるのが嬉しい。『安心して食べられるから送って欲しい』と言ってくれるから。」

S3「手をかければかけるほどいいものを作ることができる。やりがいがある。」

S4「辞めたいと思ったことはない。無農薬で栽培している。大変だけど、楽しいから続けられる。」

【辞めたくなくなることはかつてはあった。今は仕事が好きになり、たくさんできるから。】

S5「辞めたくなくなることはかつてはあった。今は仕事が好きになり、趣味の域に達した。趣味としてやっているからたくさんできる。毎日やる。」

【先祖代々の土地を守るため。】

S6「収穫の楽しみがあるから続けることができる。兼業として農業をやっているが、先祖代々の土地を手放すわけにいかない。」

S7「辞めたい時もあったが、先祖代々の土地を守っていくために辞められない。」

S8「今年は霜が降って、とうもろこしなどが駄目になった。けれど、先祖代々が守っていることだから。」

【辞めたいけど・・・】

S9「辞めたいけど、年寄りだから辞められない。」

(5) 働く意味について考え、農家の方々の営みに共感する生徒たち

聞き取り調査で聞いてきたことを発表し合った生徒たちは、「学習問題についてわかったこと」について考察した。

K君は「やりがいがあるということが仕事を続けるための一番のポイントだと思います。」と考察した。H君は「人に対する優しさがあるから作物を優しく育て上げられる。農家の方は農業が大変でもいやだとは思っていない。」と考察した。Cさんは「農家さんは、私の予想とは違って『趣味だから』と言っていました。その答えは私にとって意外でした。でも考えてみると、趣味にならないと、その域に達しないとずっと続けてこれないなあと思いました。」と考察した。

生徒たちは、農家の方々から「やりがいを持つ」「大変だけどいやではない」「趣味の域に達する」など、仕事に対する熱い思いを学んでいる。同時に「先祖代々の土地を守る」「地域を守る」など郷土愛についても触れることができた。

(6) 仮説その1について(自分が歩むべき目標を見いだす生徒たち)

体験学習後、飯田市教育委員会が生徒たちにとってアンケート調査の中に、「農業体験を通して、農業について感じたことはどんなことですか」という質問があった。この質問の答えとして、最も多かった項目が「社会に役立つ職業だと感じた」と「面白そうな職業だと感じた」であった。反面、最も低かった項目が「もうかる職業だと感じた」であった。農業体験を通して、生徒たちは働く本質的な意味を「人に役立つことをすること」ととらえている。自己の生き方に示唆を与える内容であろう。

さらに生徒たちは、「前進への糧」になることを学んでいる。7月の体験学習時、生徒たちに「体験を今後、どう生かすか」と問うてみた。D君は「今は親に甘えているとわかったのもっと自分に厳しくして社会に出た時に役立てたい。くじけずに自分に厳しくして一人前の社会人になりたい。」と、自分が歩むべき目標を学習カードに記した。さらにD君は10月、キャリア教育実践発表会に向けての授業で、「農業体験で田の草取りをしたが、草が少しでも残らないように行った。だけど、少しは残る。何度もやらないと取り切

れない。何度も同じことをやるのが大事。」と記した。丹念に何度も繰り返すことの大切さを見いだしている。T君は「自分の学んだことは、小さなことをコツコツ積み重ね、実を作ることや、同じことやどんなことでもやり遂げる集中力を農家の方から学びました。」と記し、積み重ねの大切さや物事をやり遂げる大切さを見いだしている。

これらより、仮説その1「追究を振り返ることで、自分が歩むべき目標を見いだすことができる」は検証できたと考える。

(7) お互いが共有できる体験を行い、級友の発表に共感し合う生徒たち

一学期に実施した農業体験学習で情意面の成長が見えた。振り返り学習での話し合いで、「暑い中、農家の方の指示を聞きながら頑張った。」「聞き取り調査ではコミュニケーションを大事にしながら詳しく聞くことができた。」など、級友から「努力したことの話」を聞く場面があった。この時、生徒たちは発表に耳を傾け、「聞きたい。知りたい。」様相であった。お互いが共有できる体験をしているためであろう。そこで、級友から良さを認めてもらうことで、自分への自信や前進へのエネルギーがもてるのではないかと考えた。次の可能性が見えてきた。

【仮説その2】意欲的に取り組んだことや感動体験を発表し合い、級友からの評価を生かすことで、自己肯定感を育むことができる。

4 平成21年度の実践その2 問題意識を育みながら職場体験に臨み、事後学習で級友と共感し合うことで、自己肯定感を育む中学2年生

(1) 事前学習の概要(4月～8月)

本校2年生は8月下旬から9月上旬にかけて、5日間連続の職場体験学習に取り組んだ。101名の生徒たちが55の事業所にお世話になった。

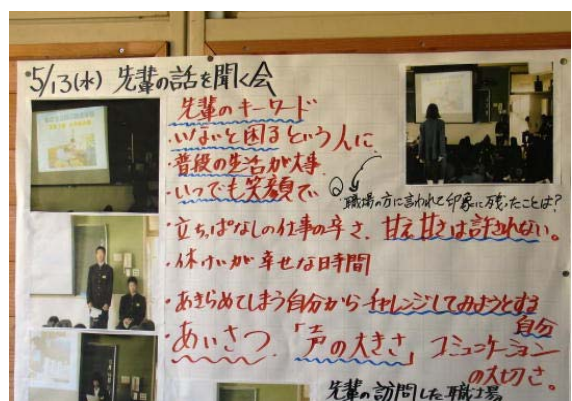
職場体験学習に先立ち、事前学習を行った。例えば、5月上旬、我々は「働くってどんなこと？」の授業や「先輩の話を書く会」を実施し、職場体験学習に向けて、生徒たちの意欲の喚起・醸成を図った。

「働くってどんなこと？」の授業で、生徒たちは、参観していただいた保護者の方に教室で「働いて大変だったことは何ですか。」「嬉しかったことは何ですか。」「仕事を選んだ理由は何ですか。」などと聞き取り調査を行った。この授業で、生徒たちは「大人の方も勉強している。」「コミュニケーションが大切。」「緊張感の中で親は働いている。」等の感想をもった。

「先輩の話を書く会」で、生徒たちは、現3年生から体験談を聞いた。生徒たちは「わかったこと」として、「いないと困る人になる。」「普段の生活が大事。」「笑顔が大事。」「あきらめて



【「働くってどんなこと？」の授業内容を掲示する】



【「先輩の話」を聞いた感想をまとめて掲示する】

しまう自分から、チャレンジする自分になる。」「挨拶や声の大きさなど、コミュニケーションが必要。」などを挙げた。事前学習はこの他に、職場見学、企業の方による講演会、講師を招いてのマナー講習会などを行った。

(2) 事前学習で、問題意識「コミュニケーションをどうとるか」をもったS君とUさん

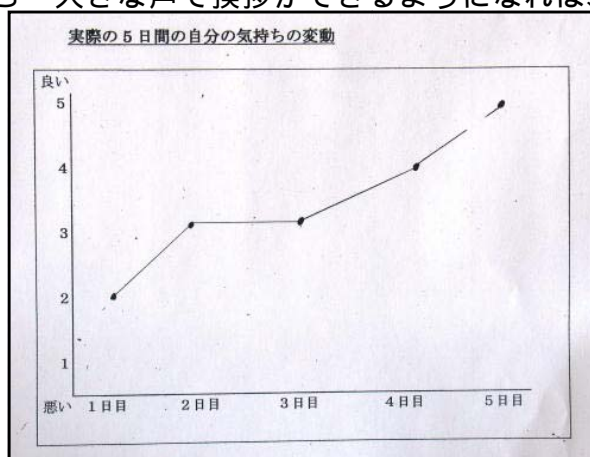
事前学習を通して、生徒たちは問題意識をもった。S君は問題意識として「人との関わりを伸ばしたい」をもった。実習先が製造業に決まったあとの問題意識は「コミュニケーションを増やす」となった。Uさんは問題意識「他人と触れあうことがあまり得意ではないので、コミュニケーションをきちんと行いたい」をもった。実習先が食堂に決まった後の問題意識は「お客さんが入店した時に大きな声で挨拶をする」となった。

S君・Uさんともに、「コミュニケーションをどうとるか」が問題意識であり、自己課題である。なお、本稿はS君とUさんの学びの軌跡を中心に記述する。

(3) 職場体験学習に問題意識「コミュニケーションを増やす」をもって臨んだS君

S君は問題意識「コミュニケーションを増やす」をもち、製造業での職場体験学習に臨んだ。第2日目、コミュニケーションを思うようにとることができず、暗中模索する。

しかし、2日目の実習終了後、職場の方から「大きな声で挨拶ができるようになれば、コミュニケーションは増えてくるよ。」と言われ、挨拶を実行してみた。するとその後、本人の自己評価「4日目・5日目は自然と会話ができるようになった。」のように、コミュニケーションがとれるようになった。このことの裏付けとして、S君が作成した「5日間の自分の気持ちの変動グラフ」を見ると、2日目から3日目は気持ちが上がっていないが、3日目以降の気持ちは上がってきていることがわかる（資料3参照）。



【資料3 S君の「5日間の気持ちの変動グラフ」】

(4) 振り返りの授業(9月、10月)で自己肯定感をもつS君とUさん

生徒たちは職場体験学習後の授業で、学習問題「職場体験で最も心に残ったことを語り合おう」を設定した。体験先が異なる4人で班を構成し、次のように班学習を行った。

班学習の進め方

一人一人が最も心に残ったことを中心に、職場体験のあらましを発表する(写真参照)。聴き手が発表を聞き、様子が浮かんでくる(描写できる)話し方をする。

発表者へ質問をする。

発表者へのメッセージカードを書く。カードその1「体験を聞いて、その気持ち分かる分かる!と思ったこと」、カードその2「体験を聞いて『いいなあ』『素晴らしいなあ』

『すごいなあと感じたこと』」を書き、本人に手渡す。

手渡されたメッセージカードを読んで感じたことを書く。



【最も心に残ったこと発表】

【 の「職場体験で心に残ったこと」について】

S君は「知らない大人の人たちと働くということで不安でいっぱいでした。2日目、僕の目標は『コミュニケーションを増やす』ということだったけれど、全くできませんでした。そうしたら職場の方が『大きな声で挨拶ができるようになればコミュニケーションは増えてくるよ』とおっしゃいました。その言葉が心に残っています。そこで、『挨拶をする』という課題をもって臨みました。ほぼ達成できたと思います。挨拶が自然とできるようになりました。」と発表した。

【 の「発表者へのメッセージカードを書く」について】

S君は、Hさんが書いたメッセージカードを受け取った。そこには「工場の中で周囲とのコミュニケーションをとって仕事をしていくのは少し大変そうだったけど、Sさんのグラフがコミュニケーションが取れるようになってからどんどん上がっていて、いいなあと思いました。」と記されていた(資料4参照)。

メッセージカードがS君の琴線に触れ、S君は、普段見せたこともないような笑顔を見せ、大切にメッセージカードを持っていた。その所作からもS君の自己肯定感を垣間見た。

体験を聞いて「いいなあ」「すばらしいなあ」「すごいなあ」と感じたこと。
工場の中で周囲とのコミュニケーションをとって、仕事をしていくのは、少し大変そうだったけど、Sさんのグラフがコミュニケーションが取れるようになってから、どんどん上がっていて、いいなあと思いました。

【資料4 S君が、Hさんからもらったメッセージカード】

S君は問題意識「コミュニケーションを増やす」について、「実際の5日間の自分の気持ちの変動グラフ」と関連づけて評価してもらっている。このように、級友との関わりの中で自己肯定感をもてることが見えてきた。

【 の「手渡されたメッセージを読んで、感じたことを書く」について】

S君も級友の発表を聞き、メッセージカードを作成した。S君はUさんの発表を聞いて「いろいろな人と接することができてすごいなあと思いました。」とメッセージカードに書いた。たった一行でしかも短く書いてあるが、このメッセージがUさんの心を打った。

Uさんは、メッセージカードを手渡され、カードに次のように記した(資料5参照)。

『(Sさんから)いろいろな人と接することができてすごいなあと思いました。』と言ってもらって、今まで人と接することが苦手だったので成長できたことがわかり、嬉しかったです。」

Uさんはなぜ、感動したのであるうか。Uさんは問題意識「人と接すること」についての努力を評価してもらったことが嬉

友達からのメッセージカードを読んで感じたこと。わかるわかってもらったり、すごいすごいと言ってもらったりして、どのようなことを感じましたか。
Sさんの「いろいろな人と接することができてすごいなあと思いました。」と言ってもらって、今まで人と接することが苦手だったので成長できたことがわかり、うれしかったです。

【資料5 手渡されたメッセージカードを読んで感じたことを書いたUさん】

しかつたのであろう。さらに、UさんはS君のメッセージから、「成長できたことがわかり・・・」などと自己の成長をも感得した。このことから、Uさんも級友との関わりの中で自己肯定感をもつことができたと考えられる。彼女もまた明日へのエネルギーを得たことであろう。

(5) 仮説その2と、現在の生徒たち

S君とUさんの学びから、問題意識をもとに体験学習に臨み、それに向けての努力を振り返り学習で発表し合い、級友から評価をもらうことで、自己肯定感をもてることが見えてきた。これらの事例より、仮説その2は検証できたと考える。

2年生で自己肯定感をもてることを目指して、振り返りの授業を行ったが、現在、何よりも大きなメリットは、生徒が明るくなり、授業中の雰囲気向上したことである。

5 まとめ

体験学習で得たことを今後の生活につなげ、自己肯定感を育むために、次の～の有効性が明らかになった。

問題意識をもちながら体験学習に臨むことで、主体的な追究ができる。

「働くことの本質的な意味」を追究することを通して、人々の営みに共感する。

追究を振り返ることで、自分が歩むべき目標を見いだすことができる。

意欲的に取り組んだことや感動体験を発表し合い、級友からの評価を生かすことで、自己肯定感を育むことができる。

平成20年度、中学3年生の林業体験学習で有効性が明らかになった～は、平成21年度の研究で中学1・2年の体験学習でも有効であった。

に関して、1年生のT君は「積み重ねの大切さや物事をやり遂げる集中力の大切さ」を見いだした。体験学習以後、物事にひたむきに取り組むT君の姿勢がある。

に関して、2年生のS君は職場体験学習に問題意識「コミュニケーションを増やす」をもちながら臨んだが、級友からの評価が、S君の自己肯定感につながった。

～について真摯に取り組んだ生徒の姿より、キャリア教育は自己の内面を耕し、自己肯定感を育み、それを未来につなげる教育であると言えるだろう。